

目的 昨年の領中の系譜—天衣から領中へ—toに続き、今回は天人と共に昇る天衣に焦点をあてて、薬師寺東塔先端の水煙の天人にはじまり、日本の諸仏像の天衣のつけ方、その源流であるインド、中国の天人の天衣と違い、天衣の意味するところ、それと関連する花喰鳥文様、含鰥鳥文様と追って天衣とつながりを深める。

方法 薬師寺東塔先端の水煙の天人とはじめ、東大寺正面八角灯籠火袋羽目板の天人、又法隆寺や日野法界寺の壁画に描かれた天人、天衣をつけている法隆寺木造百済観音立像や木造救世観音立像等の諸仏像、中国の敦煌やキジール石窟の壁画、正倉院を中心とした工芸品など、又日本の風土記や中国の史書などの分断をもとに考察する。

結果 古代中国、日本で女性達が美しく身にまとった領中は、天人の天衣にあつては、「天衣無縫」という言葉で示すように重量がなく、「天妙衣」と『妙法蓮華經』にあり、天人が身につけて天空の雲にのり天衣とひるがえし、散華や香華をまき、来迎をつけると共に昇天を助ける。日本の羽衣伝説などで天衣と鳥との関係を知り、中国の西域の花喰鳥文様にみられる鰥帯とのつながりから、鳥のように空を飛んでみたいという人間の古来より持ち続けていた願望が天空を飛翔する天人を生み出したと考える。